

ESD の理念を含んだ特別の教科道徳の実践

－ 学校行事を通しての考察 －

若森達哉

(奈良教育大学附属中学校)

橋崎頼子

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育課程・教育方法))

竹村景生・中村基一・尾本潤治・中嶋たや・有馬一彦

(奈良教育大学附属中学校)

Moral Education Contained Philosophy of ESD:
Consideration through school events

Tatsuya WAKAMORI

(Junior High school attached to Nara University of Education)

Yoriko HASHIZAKI

(Department of School Education, Nara University of Education)

Kageki TAKEMURA, Motokazu NAKAMURA, Jyunji OMOTO, Taya NAKAJIMA, Kazuhiko ARIMA

(Junior High school attached to Nara University of Education)

要旨：特別の教科道徳の授業をESDの理念を含めながら創造的に行っていく上で必要なものについて考察していく。自らの心と姿勢と向き合う「感性」と共通理解を得ながら思考する「理性」的な思考を道徳の授業に取り入れることで主体的に持続可能な社会の実現のために行動する意志、姿勢を学習者の中に育むことを模索する。

キーワード：感性 sensitivity
ケア care
道徳 moral education
共通理解 common understanding

1. はじめに

令和元年(2019)より始まった「特別の教科道徳」を本校において、深い学びとして実現するために「ESD道徳」の構築を進めてきた。竹村(2019)実践や昨年度の本校の取り組みを通してESDの理念を含んだ道徳「ESD道徳」を具体的に実践していく上でいくつかの観点が整理された。

- ・ESD道徳は社会問題、課題の中にある自然との関わり(開発)の文脈、課題を読みとる。
- ・ESD道徳は感化において内省し、変容させるものである。
- ・ESD道徳は「自分はどうしたいのか」という問いを中心として、教員もまた悩み、答えを求めめる者として参加し、共同の中で考えを響き合わせる「感化」を重要視する。

・「感化」を通して内省し、主体性をもって物事に取り組む姿勢をケアの観点から学ぶ

本稿ではこれらのESD道徳の特徴をおさえつつ、道徳授業の構成として枠組みを整理するために、「感性」「理性」「ケア」という観点到絞って述べていきたい。

2. ESD道徳における感性と理性

まず感性とケアのつながりについて押さえておきたい。竹村(2019)は「ESD道徳は教師から生徒への教化ではなく、教師と生徒の対話的關係(「間」)に感化を要求する」と述べている。ESD道徳が「感化」を基盤として学習者の内面を掘り下げ、内省し、変容を促すものであるとするならば、そこで育まれるもの、または育みたいとしているものは「感性」であり、またその「感性」から生まれる「感性的思考力」と捉えることができる。この「感化」「感性」「感性的思考力」を感じ、磨き、

深めるためにケア理論を媒体として位置づけたい。学習者が試行錯誤して、また感化されながらケアの方法を学んでいくということは、ケア、ケアリングを通して自己や他者、集団に触れ、思考する中で個の「感性」が変容していくことと置き換えて考えることができる。ケアにおける受容の姿勢（相手の問題を自分の問題として引き入れ、何が必要かを考える姿勢）は、道徳における「自分事」とリンクし、種々様々な問題、課題に応じていくための、学習者が主体的に物事を考えていくための基盤となる。

次に感性についての特徴を押さえておきたい。人は物事をまず感性的な捉えをする。第一印象という言葉が近い。そして感覚的に、瞬間的に物事に対する答え、判断を持つことができる。これを「感性的判断」と呼びたい。「感性的判断」は個人の感覚や経験によって判断されるという点で狭量的であり近視眼的である可能性が高いという課題を持っている。細かな、そして複雑な事象に対しては適切な判断力を失う。加えて学習者が直面する課題、社会が直面している課題は複雑であり多様である。よって集団で解決する、または向き合う姿勢が必要となる。

そこで「理性的」に思考していくことが意味をなす。ここでの「理性的」とは物事を冷静に多面的、多角的に捉えた上で取捨選択、または新たな考えや方法を創出し、よりよい答え、判断を下すという思考過程を指す。道徳において本校では苦野（2017）の述べる「共通理解」を求めていくことを一つの柱にしている。持続可能な社会の実現に様々な価値観、観点を含んだ合理的な意見を創出することは必要不可欠だからである。「共通理解」にたどり着く思考は、複雑な問題に答えを出すために様々な判断をしなければならないという点で「感性的判断」であることより、合理的であり、論理的である「理性的判断」を行うことが望ましい。そしてなにより他者とのコミュニケーションをとるうえで「理性的」でなければならない。

これらのことから感性と理性の双方を重視しながら共通理解を求めていくことが本実践の目指すところであると述べられる。よって本稿ではESD道徳における「感性」と「理性」の構造に着目して、学習者の実態に応じた授業実践の報告を行う。

3. ESD道徳実践・奈良めぐり

本稿は総合の学習の時間で行われたESDの理念を含んだ行事「奈良めぐり」の本執筆者が担当していた「文化・筆・墨」コースをESD道徳の実証（実践）の場として設定し実践している。これを道徳実践の内容として叙述する。

3.1. ねらい

「人々が紡いできた文化に目を向け、関係者の話や実体験を通して、その実態や課題に目を向け、自分たちの考えを振り返ることで道徳的心情を育む。」

・ケアのポイント

筆や墨といった段々と使用されなくなってきた自然とのかかわりの深いものを通して命やモノへのかかわり方を考え、感性を深める。

書文化とは何かを探究することで自己表現について考え、自己の心を理性的に捉える。

3.2. 行程

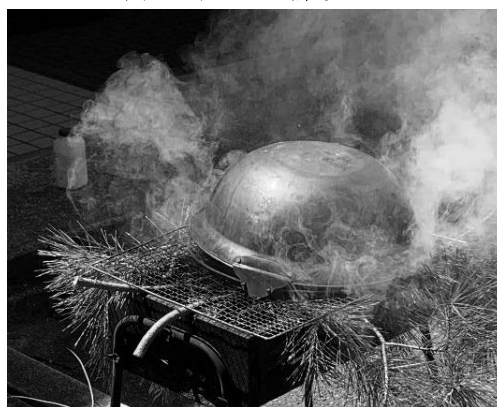
本実践は三次によって構成されている。

1次 墨づくり、筆づくり、体験を通しての質問づくり

ESDの観点から自然とのつながりを実感しつつ、地域の課題に根差した取り組みを行うことはできないかということで筆づくり、墨づくりを計画した。

墨に関しては、煤を集めゼラチンを溶かすことで膠の代わりとし、墨汁を作る取り組みを行った。墨は植物油（主に菜種油）を燃やして得る煤を用いて作成された油煙墨が一般的であるが、松の煤からも墨が作られる（松煙墨）ということから、校内に生えている松を燃やし鉄鍋に煤を集めた（図1）。野外炊飯の経験がない者も多く、煤がつくという現象を初めて見た学習者も多かった。本来墨に用いられている膠は和膠という日本独自の技法でつくられるものを用いるが、本実践では理科室から借りた精製されたゼラチンを用いている。調理用のゼラチン等を用いることも可能である。

図1 松からの煤取り



筆に関しては当日の下見を兼ねて生徒の代表が書道用品店で筆の作り方を学習しておいた。その知識を生かして、竹筆づくり、鹿の筆づくりに挑戦した。学習の過程で竹筆というものがあることを知り、関心を持ち作成を行った。本校の周りには県有地である竹林が存在する。本校の部活動の裏山クラブは県との連携によってその竹林整備を担っている。放置林の問題、資源活用の問題がこの竹林には存在する。資源活用のアイデアの一つとし

てこの竹林の竹を用いた竹筆作りを行った。書道用品店で竹筆の作成方法を訪ねたが、職人による門外不出の技術であるらしく、その具体的な方法は聞き出すことができなかったので、試行錯誤を通してそれらしいものを作成した。細かく繊維を割くことは難しく、伝統的に培われてきた独自の制作技法が存在することや、竹の種類や部位への考察に至った。鹿の筆づくりについては昨年度の奈良めぐり学習において奈良の鹿問題に触れた学習者から出たアイデアである。

奈良県では一見問題なく鹿と人間が共生しているように見える。しかしその実態としては様々な課題が存在していることから、鹿の毛を用いた活動はできないかというアイデアであった。実際には筆のようなモノの作成(図2)を通してそこに用いられている伝統と技術の高さ、逆に技術習得の困難さとそこにある伝統を引き継いでいくことの持続性の難しさを学習者たちは感じ取っていた。

図2 鹿の毛の筆



これらの活動を通して、学習者たちは具体的な問いを作成した。「職人の実態(給与、持続性、現状)」に関する問題に関してはこの作業を経たことによって内的に表出した問いである。また、動物から得た材料を使用するという実感が体験を通して得られた。

2次 書道科院生による対談

学習者との相談の中で職人、販売者、購入者(書作品を作成する人)、書道の指導者の話を聞くこととなった。最終的な活動として自分たちも書作品を作成したいということだったので特になぜ作品を書くかということ自分たちの意思として持ちたいという意見があった。そこで奈良教育大学大学院へ協力を依頼し、なぜ書作品を書くのかというテーマで対談を行い、学習者が大学院生に質問をする機会を設けた。「書道をしようと思ったきっかけは何か」、「どんなところにやりがいを感じるか」、「美しい字ときれいな字の違いは何か」、「日本人にとって書道にはどんな意味があるか」という問いを学習者があげていた。

学習者は字を書く際に手本という形で完成を決められ、その形を目指して活動するところに書写教育の不満点、やるせなさを感じている。筆や墨という自由度の高い道具を用い、創造性の高い環境にありながらも、形が決まっていることへの違和感がここに存在する。大学院生は書写ではなく、書道を学んでいる。自己を表現する喜びが書道にあるという語りに対し、学習者が感銘を受けていた。自己を表現することが人に必要なのはなぜかという問いに結び付いた。

3次 奈良めぐり

午前中は書道用品店、書道美術館の見学、午後は大学で講演と書作品作成を行った。

書道用品店3店舗に事前承諾を得て伺った。奈良市内にある徒歩で活動できる範囲の店舗へ訪れた。笹川宝文堂、古梅園、喜樹園である。学習者たちは見学と共に現状どのような課題が存在しているかを中心に聞き取りを行った。質疑の中で「墨の湿度の調節が肝心であることから、実は調湿という観点で日本古来の木造建築であるということも大切」、「昔は出稼ぎによって冬季だけ職人雇用をしていたが、今の時代では年間雇用となり、費用の問題が発生している」、「墨を乾燥させる際に用いる木灰だが、ただの灰が昔はどこでももらえたのに、こんなのでさえ今は新しく入手できない。背景には林業の衰退もある。」など現代社会における持続性の問題などを聞き出すことができた。奈良県は日本国内の墨の生産の大多数を担っている。しかし、それが同時に奈良県だけで生産が間に合ってしまうという需要の低さを表しているともいえる。現状、墨で字をかくことは日常としては非常に稀となっている。日用品ではなく嗜好品になっている。書を単なる趣味の世界としてとらえるか、文化を支える柱として捉えるかという問題が学習者に生まれた。

書道美術館において、様々な書体、書作品を見学する機会を得た。日常使いなれた文字が筆により作品として再構築される不思議、細かな工夫と表現性の広さ、なぜその字を良いと思うのか。自己との対話を通して自分なりに作品解釈を行う機会とした。

午後は奈良教育大学の講義室を借り、拓本作成、書作品の作成、鑑賞、大学教授の講話を行った。拓本は大学の授業の中で使用されているものである。大学の先生の好意で使用させていただいた。拓本は書かれた文字ではなく碑を写したものであるが、書かれた文字のように生き生きと字が浮かび上がる。作業を進める中で少しずつ文字が形を成す様子は文字を書き、形になっていく喜びにも近いものがある。学習者全員が初めての体験であった。作品制作に関しては、これまでの学びを生かして書くということとした。墨を磨り、手すきの半紙に文字を書いた。レイアウトを考えながら、また墨の濃淡にこだわりながら時間いっぱいまで何度も書き直す学習者の姿

が見られた。制作中は声を発する者も少なかった。その後それぞれの作品を見て回ることで他者が何をどのように表現しようとしていたかを確認し合った。最後に大学教授の話の聞き、奈良と書、文化の関りについて学んだ。

4. 成果と課題

4.1. 学習者の語りから

奈良めぐりを通して見えてきたものは何か。
「最初は筆や墨を見てもなんとも思わなかった。奈良めぐりの中や事前学習の中で「受け継ぐ」や「伝統」という言葉が色々な場面で繰り返されていた。この技術を「受け継ぐ」という考え方が日本文化的なものなのだと思う。墨を作るのにも気候などが考えられている。でもこれは考えられているというよりは「受け継がれている」のだと思う。今筆や墨、書かれた文字を見るとそういう背景を意識するように、してしまうようになった。」
「文化というのは私たちの先祖が作った歴史であり、努力の結晶である。意味のありなしというより、人が生きていく上で必要なものが整理されて受け継がれていく中で文化と呼ばれるものが生まれてくる。書道が今の時代に必要かどうか、どんな意味があるかまではまだ分かっていないけれど、今までの時代において必要だったからこそ今までであったと思う。なぜ必要とされているのかを理解することでその文化が何とつながっているのかを知り、どんな考え方、生き方、課題があるかを知ることができる。」

「文化を知ることとは考え方を知ることだと思う。その考え方のことを常識と呼んでいるとも思う。知らない文化や考え方に出会ったときに人はそれを非常識という言葉で表現することがあると思う。これは偏見だといえる。人間がこんな偏った考え方をするから文化の違いで生まれる争いが存在する。だから互いの偏見を理解することが大切である。自分の偏見、相手の偏見を理解すべきだと思う。」

事前学習の中で書に対してどのような印象を持っていたか聞いたときに、そもそも実感がわからないという学習者もいた。奈良県は全国約90パーセントの墨の生産率を誇っているがそのことを知っている学習者はいなかった。学習者にとって本題材は元々無関心な事項であり、自分にとって無関係な事項であったといえる。文化に対する興味がないわけではないが、今までの接点のなさ故にそこにある課題や問題に目を向けることはなかったともいえる。本題材の大本の提案者は授業者であった。授業者はニュース等で職人の減少の問題を知っており、何が今問題となってきているのか。それに対し何ができるのかという状態から始まり、学習者と共に学習する機会を得られたと考えている。「何とかしたいとは思いますが、何をしたら良いのかわからない」がはじまりだった。墨づくり竹筆づくりにおいてもともに実験的に取り組めた

ことによる感動があった。疑問を持ち、仮説を立て、体験し、考察する中に今まで目を向けてこなかったことに対する感性の深まりがあったのではないだろうか。

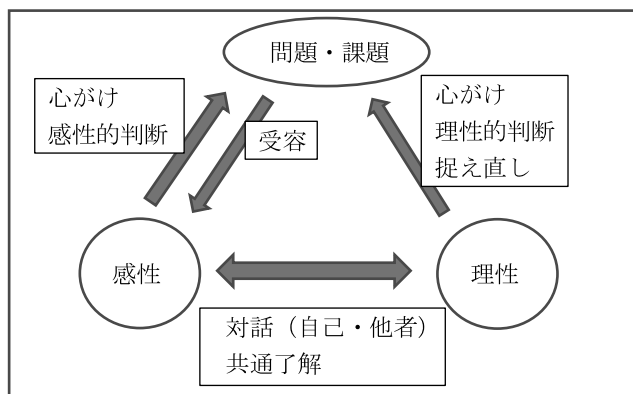
これらの活動を通して書作品をみたとき、学習者の何人かは「言葉にできない良さ」を感じたと述べている。「何が良いのかを言葉にはできないけれど何か心動かされる」という感覚である。それまで文字に対しそのような感覚はなかったにも関わらずそのように思うのは文字に対して敏感になったからであり、少し背景が見えるようになったからではないかと学習者は述べていた。これを自己との対話や他者との対話を通して自己理解を深め、それが書作品の理解へとつながろうとしている状態であると授業者は捉えている。

また、作品制作で活動をまとめたという点で本実践は実験的取り組みであったといえる。学習者によって様々な作品が描かれたが、「こんなに考えて文字を書いたのははじめてだ」と述べる学習者が多数いた。なぜ考えて書いたのかというと、「色々な言葉や知識、意味を知ってしまったから」と答える者がいた。「知ったから」ではなく「知ってしまった」と答えたのはなぜかと問うと「逃げられない感じ」と述べた。ここでの「逃げられない」は逃避したいという願望ではなく課題を背負っていることへの認識の表れであろうと推定される。ここに対象に対する感性の深まりが見て取れよう。

4.2. ESD 道德のこれから

本実践は「感性」の深まりに重きが置かれた実践であり、共通理解を得る場面や集団の中で理性的に判断していく場面は少なかったといえる。一方で個々の中において自己内対話を通して理性的に考えていく中で感性の深まりを得ていたととらえることができる。感性と理性の間、そこに対話（自己および他者との対話）を挟むことによって自己認識、社会認識が変容し深まっていく仕組みがある（図3）。それをケアという自己、他者、社会に対する心がけを目的とすることで道徳性を持たせることがESD 道德における感性の深まりの構図ではないだろうか。

図3 感性と理性による問題の捉え



課題としてケアという観点からすればケアに対して応答がなければ成り立たないという問題がある。心がけや行動に対してどのような形で応答を設定するかということがケアリングを基盤としていく上で今後の課題となる。

またこのような構造を道德の単元の中に落とし込むことが次年度の課題になる。

参考文献

- (1) 竹村景生 (2019), 「人間学としてのESD道德の構想」, 奈良教育大学附属中学校研究紀要, 第48集, pp.87-94
- (2) 苫野一徳 (2017), はじめての哲学的思考, ちくまプリマー新書
- (3) 井藤元・小木曾由佳 (2020), ネル・ノディングス 人生の意味を問う教室 知性的な信仰あるいは不信仰のための教育, 春風社

